
魔王の家の村娘 A

ごぼふ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王の家の村娘A

【NZコード】

N6193Z

【作者名】

じぽふ

【あらすじ】

現代日本に住む自称魔王の兄と、その妹の元に召喚されたのは、剣も魔法も使えないじく普通の村娘と小さなドラゴンだった。

逆召喚モノのラブコメファンタジー。

自HPで掲載したものを、加筆修正したものです。

それはクマル暦六百九十三年、八番目の月の事であった。世界の端で第二十九番目の魔王が世界征服を開始し、人類と魔物の戦いが始まるとしているそんな情勢の中。

その反対側の小さな村、アテューンのはずれの森。

アン＝ノンマルトンは月明かりの下、頭を垂れトボトボと歩いていた。

彼女がそうして歩くたび、稻穂のよつなお下げもゆらゆらと揺れる。

それに合わせ、虫のよつな緑色の燐光が大気の中をふわふわと踊った。

魔力の粒、ラーナの光だ。見たなくとも入ってくるその光を、未だに涙溢れる瞳に映したアンの心もまた、ふわふわゆらゆらと定まらずに揺れていた。

同じ思考をぐるぐると繰り返す頭の重さに引かれるように、足が前に進む。

彼女が、彼女の足が向かっているのは、アンが住んでいる村の麓にある小さな湖だった。

ラーナの混成率が高い、その清らかな水に足を浸すと、自らの悩みや悲しみがスウッと引くような気がしてくるのだ。

「ぐず……」

鼻をすすり、瞳に溜まった涙を服の袖に押し付けると、アンは再び前を向いた。

そして、そこで彼女は前方に黒い塊が落ちている事に気づいた。

ラーナの光で輪郭がぼんやりと映し出されているが、彼女の膝下ほどまでの大きさの、ハリネズミのようにツンツンと逆立つたシリエットを持つそれが何なのか、アンには察しがつかない。

鈍った頭で、彼女は一步、二歩とそれに近づいた。

すると、突如それがギヨロリと目を開けた。

そう、それは生き物だったのだ。

それがトカゲか口ばしの無い鳥のよつな口と、皮膜の張った翼を広げた所で、彼女はその正体によつやく気づいた。

ドラゴン……存在を確認されている魔物の中でも最強と名高い存在だ。

これは子竜のようだが、それでも熟練の騎士数十人を屠る力があると、アンは聞いた事がある。

その証拠とでも言うように、こんなに小さな体なのに、その金色の瞳に映されただけで体が竦む。

「ヒツ」

彼女が短い悲鳴を上げ一歩下がると、竜はそれを合図にアンへと飛び掛ってきた。

嫌だ、何故自分がこんな目に。理不尽だ。生まれた時からずっと。自分の人生は理不尽な事ばかりだ。誰か、誰か助けて。

アンは呪い、恨んだ。そして願つた。

その瞬間、彼女の足元から、漂うラーナとは別の、強いオレンジの光が発せられる。

足元の感覚が消えうせ、彼女は引かれるまま地面に開いた穴へ、落ちた。

「きやつ
「ぶふ」お！」

着地はすぐだった。

体が落下した感覚がしたかと思えば、すぐに何者かの呻きが聞こえ、下に落ちていたはずの体が、今度は前方へと落ちた。

「え？　え？」

自分の身に何が起こったか、彼女にはまるで理解ができない。四つんばいのまま顔を上げると、そこには落ちる直前に見た、オレンジ色の光を発する穴があつた。

穴。確かにそれは穴だった。彼女は初め、それを絵画に穿たれた穴だと認識した。

しかし、よく見れば違う。彼女が絵画かと思ったその背景は現実のものであり、穴は何も無い中空を当たり前のように穿っていた。

「魔法……？」

きっとそうだ。目にした事はないが、彼女のような普通の村娘が理解できない現象は、大抵魔法なのだ。

そうか。自分は誰かの魔法で、咄嗟にあのドラゴンから助けられたのだ。

彼女の中では辻褄が合い、アンは左右を見回した。

この部屋に自分を助けてくれた魔法使いがいるはずだ。

そうして、ある程度落ち着いた頭で周囲を見回してみると、そこはとても奇妙な空間だった。

草を細かく編んだかのような床。正面は木枠に薄い紙を貼り付けたような壁。

部屋の反対側には、派手な模様の毛布の上に板が乗っている。テーブルクロス？　いやそれならば天板は布の下にあるべきだし、あんな厚手の毛布を使う必要は無い。それに随分と背が低い。

彼女に理解できるのは、床に白い線で書かれた魔法陣と、その丸い外周に置かれた蠟燭だけだ。

その上に、件のオレンジ色の穴が浮かんでいる。

やはりこれは魔法の儀式の痕跡のようだ。

しかし肝心の魔法使いが……思いついて、彼女は後ろを振り返った。

「ひやっ」

すると、そこには黒いマントを羽織った少女がいた。

十を超えるか超えないかの歳頃であり、振り返ったアンに対し、両手を掲げた姿勢でぽかんと口を開けている。

とても高位の魔法使いとは思えない。しかしクマル国の十三代皇帝は、このぐらいの年でいかなる魔法も修めていたと聞いた事がある。

そうだ、魔法使いに年齢など関係ないのだ。

そう合点したアンは立ち上がり、振り向いてその幼い魔法使いに礼を言った。

「あ、ありがとうございます！ 貴方が魔法で私を助けてくれたんですね！」

「ふぎや！」

するとビードからか、踏み付けられにじられた猫のような叫び声が聞こえた。

「……使い魔？」

「違うわあ！」

叫び声と共に、地面が盛り上がる。

アンが尻餅をつくと共に、地面、もとい彼女に踏みつけにされたいた人物が立ち上がった。

「ヒップアタックから上四方固め後即スタンプとはどいつうア見だこの異世界人！」

アンに指をつけ叫ぶ相手は、彼女と同年代の男だった。

奥にいる少女と同じように黒マントを身につけており、どことな

く顔も彼女に似ている。

「ど、どなたですか？」

「どなたですかだと！？ まずお前から名乗れ！」

狼狽したアンが尋ねると、男は激昂した様子ながらもつともな事を言った。

「え、あ、わ、私はアン＝ノンマルトンです」

「普通な名前だな！ 異世界人のくせに！」

勢いに押された形でアンが名乗ると、初対面のはずの男が失礼な事を吐き捨てる。

その言葉が、彼女の心に火をつけた。興奮しながら、思わず言い返す。

「ふふふふ普通ってなんですか！？ ジャア貴方はどんな名前だつていうんですか！？」

「平平良良」

「ヘイヘイヨイヨイヨイ？」

「違うわ！ それでヒラタイラリョウと読むのだ。教養のない異世界人めいのかよ最近の異世界人は……」

また何か叫びかけて、男の言葉がぴたりと止まる。

「ホンと咳払いをし。

「それでヒラタイラリョウと読むのだ。教養のない異世界人め」と罵倒しなおした。罵倒には変わりない。

そんな事を言われても、男は確かに先程ヘイヘイと自分で楽しそうに名乗ったのだ。

それを別の読み方で読めとはどうこうことだ。

アンは眉間に皺を寄せた。

男も何か違和感を覚えたようで、首を捻っている。

すると男の後ろにいた小さい方の少女が男の方を叩いた。

「なんか異世界移動ゲートをくぐると現地の言葉が分かるようになるけど、たまに誤翻訳するつて書いてあるよお兄ちゃん」

手に持った分厚い本を指差し、男に何事が説明している。。

「えーっと

「あ、私は平平良舞。この男の人の妹」「はあ、初めまして。平たいラブさん」

「……うん、翻訳に關してはかなりダメみたいだね。私の事はマイつて呼んでね。えーと、アンさん」

相変わらず事態が飲み込めずに曖昧な返事をするアンに、少女がため息をつく。

「くそ、ポンコツ魔道書め。通りで安いはずだ」

男、ヒラタイラリヨウが魔道書とやらを、妹、舞から奪い取り床に叩きつける。

「でも異世界から召喚は出来たんだから成功なんじゃない?」

それを舞がなめた。

先程から彼らが頻繁に出している単語、それがずっとアンには気になっていた。

彼女はついに勇気を出し、彼らに質問をした。

「あ、あの、異世界ってなんですか?」

「だから読んで字の如く、異なる世界という意味だ。そのぐらいは流石に翻訳されているだろう?」

良がバカにしたように肩をすくめた。この、異世界? においても、そういう仕草は共通らしい。

「要するに、お姉ちゃんの居た場所の常識とか法則とかがまるで通用しない遠い場所ってことね。ちなみにこじは地球の日本って国だよ」

それをフォローするかのように、舞が補足する。

よくは分からぬが、とにかく自分は一瞬にして、遠い場所へと連れて来られてしまつたらしい。

それだけを認識すると、アンは叫んだ。

「そ、その、困ります!」

「困る?」

「だ、だって、明日も朝食の準備をしなきゃいけないし、買い物も

あるし、家族だつて心配……」

そう言い募り、アンは途中で言葉を詰まらせてしまつ。

頭の中に、今夜の出来事がフラッシュバックした。

「……心配するな。俺は別にお前のよつな一般異世界市民を呼び出すためにこんな儀式をしたわけではない」

そんな彼女をどう思つたのか。良は後ろ頭を搔きながらやうせばげる。

もしかして彼は、自分を慰めているつもりなのだからつか。アンの意識が、追憶からそんな思考に引き戻される。

それから、彼はニヤリと笑つて黄白色の穴へと近づいた。

「俺様が華々しくトビユードする為にこのゲートを開いたのだ」

「ダ、ダメです！」

そこで、彼に例を書ひべきか迷つていたアンはよつやく戻つ返つた。

良はそこをぐぐりとしつゝが、その先には……。

「ダメ？」

彼女の言葉に振り向いた良の脇の下辺りから、黒いモノがにゅつと顔を出した。

それは先程アンが襲われた生き物。小さなドラゴンの頭であった。

「ドラゴンが……出たー！」

「うおおおおおー！」

それに気づいた良は、咄嗟の行動だつがドラゴンの頭を脇の下に抱え込む。ドラゴンが嫌がり首を振ると、それだけで彼の体が浮き上がつた。

「お、お兄ちゃんー！」

「な、な、な、なんだこいつっうー！？」

良が両手で竜の首に掴まり、上下に跳ねながら叫ぶ。

「だからドラゴンですよドラゴンー！」

「ドラゴン、って、あの、火とか、吐く、奴、か！」

「そうですよ、火とか、ひいいいー！？」

アンの言葉が終わるよつまく、ドリーハンは口を開きやうから何か飛ばした。

それは舞のマントをかすめ、さうに床をも貫通する。

刺激臭が鼻を突いた。

「酸か！？」

良が叫んだその通り、それは高濃度の酸だった。しかしそのあまりの速度に、アンには空間が削れたようにしか見えない。

「ぬおおおー！」

アンが壁に気を取られている間に、良の更なる叫びが響く。そちらを見ると、ゲートを飛び出した子竜の体が宙を浮いていた。正面へとスウッと飛び出したかと思えば、重力に引かれて落ちる。自分もあんな風に出てきたのかしら。現実から逃避しかけたアンの頭がそんな事をぼんやりと考える。

「のおおおおおー！」

落下した子竜が、ふるふると頭を振る。その度に良が左右へと振り回された。

やがて、子竜の瞳がはつきりとこちらを捉える。

「逃げるー！」

良が叫ぶが、アンも舞もすくんで動けない。

子竜が再び口を開けた。

「くそ、こいつはー！」

良が子竜の首に回していた手を片方放し、頭上に掲げる。

それが背後にあるオレンジの光に照らされ、一瞬輝いて見えた。そして、振り下ろされる男の手。

それが子竜を。

「おー、よーしょしょしょしょし」

撫で始めた。それも凄い勢いで。

「そんなこふー！」

している場合かと、叫びかけたアンの口を後ろから舞が塞いだ。

「お、お兄ちゃんに任せて」

そんな悠長な。自分が口を塞がれている今にも、子竜は口から酸を吐こうとしているのだ。

舞の突飛な行動に驚き、いつの間にか体も動くようになっている。

アンが慌てて逃げようとする。

「キュオオオオ！」

子竜が叫んだ。顎を上げ、背筋をぴんと伸ばす。

更に良がその背中を撫でていくと、今度はくたりと力を抜き、彼に体を預けはじめたではないか。

その顔はドラゴンなど初めて見たアンでも分かるほど弛緩しきり、良が首を搔いてやると、子竜のほうからそこを擦り付けていく。

「相変わらず、お兄ちゃんのナーテナーデはすごい……」

「ふはっ、な、なでなで？」

舞が自分の口を開放したのでアンが聞き返すと、少女はうんと真剣な顔で頷いた。

「そう、お兄ちゃんのナーテナーデは特別なの」

「と、特別って……？」

「あれを受けたが最後。どんな生き物も抗えなくなってしまうの。誰彼構わず飛び掛つて皆に恐れられていた三丁目の猛犬ペロだつて、お兄ちゃんになでられた途端骨抜きになつて、今では飼い主に撫でられても『ご主人様は好きだけど、でも私あの男の指が忘れられないの……』みたいな顔をするようになつてしまつて……」

「あ、あれは、魔法なんですか？」

しみじみと語る舞を遮り、アンは彼女に聞いた。

ドライゴンと言えば最強の魔物であり、いくら獰猛だらつと犬と比べるべくもない。

人間に屈するなど有り得ない生き物のはずだ。

それが、今は気持ち良さそうに目を閉じ、口の端から酸の涎をジユウジュウとこぼしている。

「ううん、私達は魔法なんて使えないよ」

「で、でも……私を呼び出したじゃないですか」

「あれもいっぱい準備して、色々用意して、魔道書の通りにやって偶然できただけだから」「そ、なんですか」

それでも魔法は魔法じゃないの？ とアンは思うのだが、この場所とアンのいた所では常識が違うのだと言われたこともあって、深くつっこむ事が出来ない。

「よつし、良い子だ。流石異世界最強生物。良い毛並みではないか。ほれ、首をあげろ」

良が言うよつし、よく見ればそのドラゴンは短い毛が体を覆つており、皮膚は目と同じく金色をしていた。

良が指示すると、子竜は言われた通り首を上げた。彼が両側から首の付け根辺りを揉んでやると、首を伸ばしフルフルと震える。

ドラゴンは賢い種族で人語も解すると言ったことがあるが、それに従うなどと言う話は聞いたことがない。

完全に、ドラゴンを手なずけている。

そんな事が出来る人間など、アンは知らない。

いや、人間以外なら、ただ一人だけそんな事をできる存在に、彼女は思い当たつた。

「…………魔王」

世界で唯一人……いや、正確には人間ではないが。そして倒されても倒されても現れるので単体でもないが、ドラゴンが従う存在と言えば魔物の長、魔王しかあり得ない。

いやしかし、彼が魔王？ まさか、自分を助けてくれた人がそんな事……。

「さあて、俺様の技術が異世界に通じる事は分かつたし、早速征服しにいくかー」

「魔王————！」

しかし葛藤するアンの思いは、あつさりと裏切られた。

「わっはっは、その通り！ 俺は貴様らの世界を支配する魔王だ！ 指を突きつけるアンに対し、良は胸を張り高らかに宣言する。

どうしようか、自分は本当にこれから世界征服を行く魔王に出会ってしまったのだ。

「ようし、とにかく異世界へワープだ！ お前も戻してやるから感謝しろ！」

勝手な事を言いながら、魔王は子竜の背中をポンポンと叩いた。子竜が名残惜しそうに立ち上がり、彼を見上げる。尻尾など左右に揺れたりする。

その様子に満足げに笑い、男がくるりとゲートに向き合った。何とか彼の侵攻を阻止しなければ。今は既に別の魔王が世界侵略を始めているのだ。

それなのに更に魔王が増えてしまっては、本当に人類は支配されかねない。

何とかしなければ、アンの頭がそんな思いで埋め尽くされる。そして氣づくと彼女は。

「えーい！」

「クケー！」

「ギャー！」

「お、お兄ちやーーーん！」

三重の悲鳴が響き、魔王がバレリーナのよつに回転しながら異世界への穴をかすめ、周りに立ててあつた蠟燭につっこむ。

蠟燭が盛大に音を立て倒れ、魔王のマントに引火し、彼は痛みの為か火を消す為かゴロゴロと転がる。

そのおかげで火は燃え広がらず、床を転々と焦がすだけで消火された。

「はあ、はあ、はあ」

子竜の尻尾を掴んだまま、荒い息を吐くアン。

パチンという音がし、部屋の中が眩しい光で照らされた。

「いきなり何すんだよ…」

鎮火を確認した良が、寝転んだまま抗議の声を上げる。

それから、「何をするのだ」と何の拘りか言い直した。

一時の衝動から覚め、アンが口を開きかけた時。

パキン。

甲高い音が例の穴から響いた。

全員がそちらに視線を向けると、穴であつたはずの場所に氷のような膜が張り、パキンパキンと、そこに次々とひびが入つていく。

「ああ――！」

とどめは後ろの少女、魔王の妹、舞の叫びであった。

それに呼応するように、一斉にひびが広がり、ついにはバキン

！と一際高い音を立て、欠片を撒き散らしながら碎け散った。

「うひやあああ！」

降り注ぐそれを避けようと、奇声を上げながら転げまわる魔王良だが、砕け散った欠片は地面につく前にスウッと消滅した。

「ああ――！ 異世界ゲートがー！」

そして良の頭上には、もはやあのオレンジ色のゲートとやらはない。

明かりのついた、酸と焦げた匂いが充満する部屋に魔法陣だけが残されている。

「ななななんてことをしゃがる！ しゃがりますのだ！ するのだ！」

良が立ち上がり、何度も同じ言葉を言い直しながらアンに詰め寄る。

「だ、だつて貴方が私達の世界を滅ぼすつていうから

「滅ぼすのではない支配だ！ というかどうしてくれなのだ！ 材料を集めなおすにはまた時間と費用が……」

「し、知らないですよそんな事！」

まくし立てる良の剣幕に耐え切れず、アンは手に持つたもので口の身を庇つ。

そして彼女が手に持っていたものとね。

「シギヤ――――――！」

こんな事は生まれて初めてだったのか。鈍器扱いをされた後、今まで放心していた子竜であつた。

子竜は大声を上げ口から酸を発射した。

首を捻り、それを間一髪で良が避ける。

「うおおお、せっかく懐柔したのにこのバカ者が！　お前ちょっとと抑えてろ！　バカ、こっちに口向けんじゃねえよ！」

「え、え、え、でも今すごい暴れて！　何とかしてくださーーー！」

「誰のせいこうなつたと思ってる！？」

「お、お兄ちゃん、これ以上家を壊したひママが……！」

「言つてる場合かー！」

こうして、西暦二千十年。

アン＝ノンマルトンは異世界の魔王の元へと召喚された。

「で、どうしてくれのだ」

穴が開き、床が焦げ散々になつた和室。……という場所から、アンは男、平平良良に連れられ階段を降り、革張りのソファーのあるリビングらしき場所へと案内された。

テーブルを挟んで向かい側に座つた良が、開口一番に言つたのがこのセリフである。

「そ、その、殴つた事はごめんなさいですけど、やっぱり支配とか征服とかは良くないと思います」

「一般人らしい画一的な意見だな。そもそも世界というのは既に誰かしらに支配されているのだ。だつたらちよつとぐらい俺が支配してもかまわんだろう」

「一般人に殴られて転げまわる人の支配はちょっと……」

「殴った奴が言うな！」

良が叫ぶと、その膝の上に乗つっていた子竜がびくりと首を起こす。

先程の一の舞を恐れてか。彼は子竜の背中を慌てて撫でる。

「はーい、お兄ちゃんとえーっと、アンさんにも麦茶とお菓子どうぞ」

そこへ彼の妹、舞が盆の上に飲み物と紙に包まれた物を乗せてやつてきた。

彼女は兄の隣に座ると、包み紙をはずして中の物を口に入れる。アンもそれを真似してみると、口に入れた途端甘い味が広がつた。

「おまんじゅうで大丈夫だつた？」

「ふあ、はふい」

舞に問われ、アンはコクコクと頷く。なるほどこれはおまんじゅうと言うのか、美味しい、が、彼女の口では、一口で食べるには大きすぎる。

もしかして異世界の人は自分より口が大きいのかしらん。などと

考えながらアンはそれを何とか嚥下する。

「……妹の真似をして一口で食つ必要は無いぞ。というか麦茶飲め」「あ、ありがとうございます」

見かねたという様子の良が、恐らくガラスで作られている容器に入った褐色の飲み物をアンに差し出す。

それを受け取つて飲み干すと、胸のつかえも取れた。味も悪くない。

「クーラーつけるね」

言つて、舞が手に持つた何かを操作すると、ピッと音が鳴りびこからか涼しい風が舞い降りてきた。

なんだろうこれ。アンがキヨロキヨロと周りを見回していくと、良がコホンと咳払いをした。

慌てて視線を戻すと、彼はじつとこちらを見ている。

どうやら先程の質問の答えをずっと待っていたらしい。

「えーと、それで私どうすればいいんでしよう？」

「俺に聞くな！」

落ち着いた所で尋ねると、良に再び怒鳴り返された。

怒鳴りながらも子竜を撫でているのだから、器用なものだ。「で、でも私、この世界の勝手という物を知らないの……。ここつてどんな世界なんですか？」

その質問に、向かいに座つた兄妹は顔を見合わせる。

私何か変な事を聞いたかしら。などと彼女が困つていると。

「えーと、とりあえずこいつドーラゴンとかはいないね」

「あと魔法もないな」

「エルフとかドワーフとかもないね」

交互にあれが無いこれが無いと挙げていぐ一人。

「勇者も魔王もいない」

「魔王はいるじゃないですか」

良の言葉にアンがツツコミを入れると、彼は眉間に皺を寄せ、難しい顔をした。

「俺は……まだ正式には魔王ではないというか、まあいざれそういう人材だが……」

「魔王見習いといつ訳ですか」

「一気に威厳がなくなるから、その呼び方はやめろ」
言葉を濁す良に助け舟を出すつもりでアンが尋ねると、彼の顔は更に渋いものとなつた。

呼び方はともかく、認識としてはそんなところで良いのだ。アンはそうあたりをつける。

「とりあえず、良さんつてこの世界を支配してゐるわけじゃないんですね」

「こんなつまらん世界、支配する価値もない」

この世界が自分に殴り飛ばされるような人間が支配する世界ではなくて良かった。アンがほっと息を吐くと、良はつまらなうにそっぽを向いて吐き捨てた。

「そういえば、先程から無い無いって言つてしましましたね」

「ああ、何も無い空虚な世界だ」

つこには子供のように口を尖らせる良。彼はこの世界が嫌いなのかしら。そう考へると、アンの胸に言いようのない感情が芽生えた。世界を、嫌う。今まで一つの世界、その端の小さな集落しか知らなかつた彼女には、無かつた感覚だ。

「おまんじゅうはあるじゃないですか」

「おまんじゅうがあつてもなあ……」

アンがその解析不能な気持ちに戸惑いながらフォローすると、良は難しい顔をしたままではあつたが、とりあえずこちらを向く。「それに、この部屋にだって私が知らないものが沢山ありますし。……あ、そうだ。私の世界のことが知りたいです！」

「俺が聞いたのは、どうしたいかではなくどうするかだ！」

「ああ、そういえばそんなお話を返すと、良はがっくり

すつかり忘れていたアンがあつかけらかんと返すと、良はがっくりと肩を落とした。

しかしどうするのかと言われても、そもそもその話として、とアンは考える。

「えーと、良さんは私をどうしたいんですか？」

普通はこういう場合、選択権を持つのは相手側だろ？。ここは彼の世界であり、アンは加害者であり、しかも良は魔王のタマゴなのだ。

魔王相手に加害者になつた自分に、アンは今更ながら呆れてしまう。

「え、俺？」

だが肝心の魔王はといえど、何やらとても間の抜けた反応を示す。「そうです。こつ、私をどうしたいとか。どうしてやりたいとか」言いながら、アンが身を乗り出し机に手をつくと、魔王良は慌てて身を引いた。

「ば、バツカ！ 若い女の子が何言つてんだよ…」

「え？ 私何か変な事言いました？」

「ごめんねアンさん。お兄ちゃんつて人の十倍純情なの」

「は、はあ

異界ならではのやり取りだらうか。アンにはもはや恒例となつた生返事しか出来ない。

「バカ言つな！ 魔王たるもの一辺たりとも汚れていない心を持つものか！ エーと、お前にさせたいことだなー。させたいこと……」

それに対して何の対抗心を燃やしてか。良は高らかに宣言すると、こめかみに手を当て考え始めた。

もぐもぐと新しい饅頭を摘みつつ、彼の答えを待つアン。

それから、アンが更にもう一個食べようか迷つてゐる間に、良はアンに指をひとつ向けた。

「そーだ召使いだ！ お前は俺の召使いになるのだー。」

「お兄ちゃん、考えた割に発想が小学生並み」

隣の舞が、半眼で彼に呴く。

「召使ひって、具体的には何をすればいいんでしょう

「この家を全部掃除させるし、俺達の料理も毎食作つてもうつー。」

「それでだけ良いんですか？」

「え、ああああ……あー、えーと、あとゲームのレベル上げもやらせる

「お兄ちゃん……」

アンにはそれがどんな行為かは分からぬが、良の妹が彼を哀れみの目で見ている以上、大した事ではあるまい。

「私、魔王さんのする事だから儀式の生贊にされちゃうとかそういう事を考えてました」

「……それを想定していく、よく俺に判断を委ねられるな

「えへへ」

「褒められてないからね、アンさん」

「こいつ、思いの外バカだぞ」

照れ笑いを浮かべるアンに、兄妹が揃つて渋い顔になる。子童までが短く鼻息を鳴らした。

召使い……。アンはその言葉を反芻すると共に天井を見上げた。そこには、先程ドラゴンが酸であけた穴が開いている。

「そういえば、この家にはお一人で住んでるんですか？」

彼女の世界の基準では、良ぐらいの年になると自立する者も珍しくは無い。だが、このような一軒家を持つものは稀である。一山当てた冒険者ぐらいのものだらう。

「……今はそうだな

渋面のまま、良がそう答えた。

「やつぱりお父様も魔王で？」

質問を重ねると、その渋面が濃くなり、汁でも出そうな表情になる。

「極悪な人間ではあるな。自分の下半身さえ支配できないが

「へえ……」

やはり意味はよくわからない。舞が言つていた翻訳ミスとやらの所為かもしけないが、良の横を見ると彼女も浮かない顔をしている

ので、アンはそれ以上の追求をやめた。

「そんなことより」

良がため息を吐くと、あからさまに話を変えようとする。

「なんでしょう？」

やはりあまり触れないほうが良い話題のようだ。それでも、アンは彼の話に乗ることにした。

「お前、シャワーを浴びて来い」

「え！」

「ええ！？」

良の言葉に、女性一人が揃って声を上げる。

「お兄ちゃん！ 召使いなんていつて田的はやつぱり……」

「ば、違つ！ そんな意味じやねえ！」

兄妹が田の前で騒ぎ出す。子竜がうるわしおそっぽを向いた。

「その、田が腫れてるから……」

「ああ……」

「あ、あれー？」

良がボソリと漏らすと、舞がアンの顔を見、頷く。

その言葉に、アンは慌てて田元を拭った。

どうしよう、きっとここに来る前ずっと泣いていた所為だ。

そんな顔でわざわざまでずっと話していただなんて。恥ずかしくなり、ぐじぐじとこするが、それで直るはずもない。

「べ、別にそんなに田立つ訳じやない。それにわざわざも散々暴れたからな。……風呂の使い方は分かるか？」

「え、シャワーって、お風呂なんですか？」

「お前らの世界にはシャワーも無いのか」

「え、あ、はい。お風呂も普通はお金持ちの家が公衆浴場しかありません」

「……お前はしばらく独りにできそうじゃないな」

シャワーを知らないなら、さつき驚いていたのは何なのだ。愚痴つてから、良は妹の頭をぽんと叩いた。

「舞、入れてやれ」

「……はーい」

妙な間があつて、舞が返事と共に立ち上がる。

何だろ？と気になりはしたが、それよりもアンには意外な事があつた。

「親切なんですね、良さんって」

初対面の時はずっと怒っている怖い魔王だと思つていたが、あんな事をした彼女をひどい目にあわせる気もないようだし、涙の痕に気づいてお風呂まで勧めてくれる。

この人は本当は、良い人なんぢやないかしら。などと考え、アンが彼に礼を言つと。

「お、俺は、親切なんかぢやない！」

急に、良が立ち上がり叫んだ。子竜が慌ててテーブルの上に着地する。

先程から怒つてばかりの良だが、何か様子が違う。拳を握った彼の表情は、怒りと言つより後悔、もしくは自己嫌悪のよつななものに溢れている。

何か悪い事を言つたかしら。彼の豹変具合にアンは困惑した。良の方も言つてからハツとした様子で。

「その、召使いが汚れていると、俺の教育が問われるだろ？」と付け足した。

こちら側に回ってきた舞が、良の様子を痛ましそうに見てから、アンに微笑む。

「お兄ちゃんは仮免氣味にも魔王なんだから、親切なんて言ひやダメだよ。こう言つてあげなきや」

そうして、彼女はアンに「こによ」と耳打ちをした。

その内容を聞き、よくは分からぬまま頷き、アンはその言葉を口にする。

「安いシンデレですね、良さんって」

「誰が安いシンデレしか――――！」

また怒られた。しかしその怒声に、先程のような内側に向けられたものは無い。

「ええい、良いから早く風呂に入つてこんか！」

それを確認したアンは、手を引く舞に連れられ、風呂場へと向かつた。

その胸には、妙な安堵があった。

VSサービスシーン

脱衣所だと告げられた場所で、アンはおずおずと服を脱いでいく。ずっと風呂と言えば公衆浴場であつた彼女なので、同性に裸を見る事など慣れたものだと思っていた。

だが、まったく知らない人間でもない、かと言つてそれほど親しいとも言えない人間と個室に入るとなると、やはり緊張した。

そう、この世界の風呂は個室なのだ。体を洗う場所と浴槽。それが人間二人分ほどのスペースしかない。

「アンさーん？」

一方で舞は体を隠す様子も無く、手に持つたホースから、ジョウロのように細かく分かれた水を出している。

「え、いえ、その……ちょっと待ってくださいね」

言つて、彼女は背中を向け、自らのスリップの胸元に指をかけ、その下の体に目をやる。

彼女が躊躇する理由は、もう一つあった。

「大丈夫だつて、私よりは大きいから」

「舞さんつて、おくつなんですか？」

「六十六」

「え、舞さんつてもしかしてお婆ちゃんなんですか！？」

思わず振り返り、この世界の人間は老けないのか。敬語を使っていて良かつた。などとアンがビックリしたり安心したりしていると、舞が違う違うと手を振つた。

「ああ、年ね。年はねー、十一歳だよ」

それから、彼女はそう答え直す。

この世界と、自分のいた世界で年の数え方つて一緒なのかしら。

一瞬疑問に思つたアンだが、舞を見る限り十一歳と言われて違和感が無い。

魔法の翻訳のおかげなのかもしない。結論は出そうにないので

アンは疑問を脇に置いた。先にでた数字についてもだ。

「十一歳なら、これから大きくなるじゃないですか……」

「アンさんはいくつなの？」

「十六です」

「あ、じゃあお兄ちゃんと一緒にだね。それならこれからもいつと大きくなるよ」

「でも、私はその……」

「ほら、早く入る。風邪引いたらうつよ

「は、はい」

言いかけたアンだが、舞に急かされ、躊躇しながらもついにスリップとドロワーズを脱ぎ捨てた。

結んでいた髪を解き、そろそろと風呂場に入る。

「すぐるから気をつけてねー」

「ど、どうも」

「で、これに座つて」

「わかりました」

「お客さん、こいつお店は初めて？」

「はい？」

「ごめん、何でもないの。お兄ちゃんにやつたら下品だつて怒られたし

勧められるままに不思議な材質の椅子に座ると、舞が不可解なことを言い出した。

アンが聞き返すと、通じなかつたのが不満らしく舞は口を尖らせる。

この世界の定型句か何かだらつか。彼女にはやはりよく分からない。

「お兄さんともこいつやって入るんですか？」

「うん、そうだよー。あ、シャワー当てるから冷たかつたりしたら言つてね」

返事をしながら、舞がそのスコールのような水をアンの背中に当

てていく。

……温かい。お湯である。これがシャワーだったのか。

彼女達の話では、この世界には魔法が無いらしい。だが、これが魔法でないなら何なのだろう。そう、アンは考えた。

「どうしたの、アンさん」

返事をしないアンを訝しがって、舞が尋ねる。

「いえ、この世界つて不思議だなーと思つて」

「そつかなー？ そっちの世界のほうがずっと不思議だと思つナビ」「良さんもそつ言つてましたね。だからひかりの世界に来ようと思つたんですか？」

「んー、私はそういう訳でもないんだけどねー。あ、皿をつぶつたほづがいいよ」

言われた通りにすると、髪にシャワーが当たる。

「アンさんつて、髪キレイだよねー。あ、全然引っかかるないや」

言いながら、舞がアンの髪の梳いていく。

「あ、舞さん？」

「髪、洗つてあげるね。シャンプーが皿に染みるから開けちゃダメだよ」

舞はしばらくシャワーと共に指でアンの髪の汚れを落としていく。それから彼女はアンの髪にペタペタと何かを塗り、頭皮を指で揉むようにして広げていった。

アンは他人に髪を触れられる事に多少の抵抗がある性質なのだが、彼女に触られ、なおかつ謎の液体を塗られてもあまり不快ではない。「うつふつふ、私もマッサージは自信があるんだ。お兄ちゃんには全然かなわないけど」

しかし何故だろう。指自体は心地よいのだが、彼女の笑いからは不穏なものを感じる。

シャワーは温かいといつのこと、不思議な寒気がアンの背中をゆっくりと上つていった。

そんな彼女に構わず、舞は喋り続ける。

「私の髪、いつもお兄ちゃんに洗つてもらつてるんだよ。お兄ちゃんの指はねー。すんごいの。気持ち良くて、いつもぼりぼりとしるうちに終わっちゃうんだ……。でも、私の髪には終わった後もぼんやりと感触が残つてて、それが時間が経つと引いていつちゃうんだけど、アルデンテのパスタみたいに、髪一本一本の芯に熱さが燻つててね。クセになつちやうの」

シャンプーとやらは、じつぜん泡のよつだ。それのおかげで上手く喋ることができない。

それができたとして、彼女のトークに口を挟めたかは分からないうが。

「会つたばっかりのアンさんに言つのもどうかと思つんだけど。私ね、今迷つてるの。何に迷つてるのかつていうと、大人になるか子供のままでいるか。子供のままでいたほうがお兄ちゃんにはいっぱい撫でてもらえると思うんだけど、子供のまじやお兄ちゃんはきっと離れて行つちゃうし、きっと大人になつたらもつと気持ち良いことが待つてると思うんだよね」

彼女の話を聞きながら、アンは何となく理解していた。ドライゴン、あのプライドと知能の高い種族を一瞬で陥落させる指。それを十一年間受け続ける事の意味を。

シャワーが再びかけられ、シャンプーが洗い流されていく。

前髪を顔に貼り付けたまま、アンは動くことが出来ない。恐る恐る、よつやく目を開けると、鏡に映つた舞がニッコリと笑つていた。

「はい。今の全部ジョーダンね」

「はい！」

「ごめんね、異世界の人には分かりにくかつたよねー」

「じょ、冗談……」

言いながら、今度はタオルに石鹼をこすり付け始める舞。

アンの頭は混乱したまま、彼女の言葉についていけていない。

冗談だったのか。こちらの笑いのツボは本格的に自分達のものと

は違つたらしい。

アンが自分でも成分のよく分からぬ深い息を吐いている。

「お兄ちゃん。体のほうは洗ってくれなくなっちゃったんだよねー。

だからアンさんで憂さ晴らしさせてね」

鏡に映つた舞が、タオルを持っていないほつの指をワキワキと動かしていた。

「そ、それも冗談ですよね」

「うふふふふ？」

「イヤ――！」

アンの悲鳴が風呂場に響く。

その日、その場所で、アンは魔王より恐ろしい人物を見たのだった。

「ただいま戻りましたー……」

アンがふらふらと居間に戻ると、雑誌を読んでいた良が子竜と一緒に顔を上げた。

「物凄い悲鳴が聞こえたが、無事か？」

「き、聞こえていたなら助けてくださいよお」

「どうせシャンプーでも目に入つたんだろう？　そして俺が何事かと駆けつけると、キャーエッチーとか言って、その顔に桶でも投げつけるつもりだつたに違いない。お前のような一般異世界人がやることなど分かりきつているのだ」

そして意味不明なことをつらつらと言ひ。多分これは「冗談ではなく本気で言つてはいるのだろう。もはやそれがどちらであろうが、今のアンにはどうでも良くなつていた。

「あー、良いお湯だつたねー。アンお姉ちゃん」

そんな彼女の後ろから舞が現れ、アンに意味深な視線を送る。

「は、はい、舞様……舞ちゃん」

アンは彼女にギクシャクと言葉を返す。まさか年下の同性に、あんな辱めを受けるとは予想していなかつた。

良は一人に不審そうな視線を向けてから、まあいいと咳払いをして、その格好は何だと、もつと不審そうな目で見た。

「何つて、パジャマだよ」

それに対し、舞がさらりと答える。

「へそが出ているではないか」

良に指摘され、アンはまるで雷が落ちたかのように急いでへそを隠した。

「私のじゃサイズが合わないんだもん」

アンが着ている服は、パジャマというらしい。

この世界の標準的な寝具だと舞は言つており、ゆつたりと作られている為アンでも着る事はできるのだが、如何せん手足や臍の丈が足りない。

舞がこれで良いのだというので従つたが、やはりこの着こなしは間違つているようだ。

「……風邪引くぞ。腹巻でも出してやれ

「りょうかーい」

返事をし、舞は一階へと上がつていった。

「しんせ……ツンデレにどうも」

「だからその奇怪な日本語はやめろ」

親切、と言いかけてアンが言いなおすと、良は辟易とした顔で返した。

彼は手に持つたおまんじゅうを、膝の上にいる子竜にやつしている。

「食べさせちゃつて良いんですか？」

「……異世界最強生物が、まさか饅頭詰まらせて死ぬなんて事はあるまい」

それでも少しは不安に思つたのか、彼はそれを千切つて『えはじめた。

何となくそれを微笑ましく思いながら、アンは彼に向かいに座る。「というか、こいつの餌には何をやればいいんだ？」

彼女の表情が気に入らなかつたのか。やはり良は瀟然とした顔をしながら、アンに問いかける。

「んー、確かに何でも食べますよ。牛とか、人間とか」

「人が手を差し出してるときに、不安になるようなことを言つな」

「だつて、ドラゴンってそういう生き物なんですよ。普通の人は傍に居たいとすら思いませんよ」

それを平然と飼いならし、飼い犬扱いである。魔王といえど恐れは無いのか。アンもさすがに呆れて、彼にそう言つた。

「その割には平氣そうだな。一般異世界人代表」

「え？ ああ、何だかよく分からぬ事が続いた所為で、感覚が麻

痺してきちゃって

良に指摘され、アンはようやく血の矛盾に気づいた。

出会ったときは恐怖で震えが止まらなかつたと言ひのこ、今はこのドリーナンに愛嬌のようなものまで感じ始めてこる。

先程、風呂場で死ぬより恐ろしい田にあつたからだらつか。

それとも。

「私の世界との繋がりって、この子しかいないんですね」
そうだ、今の自分はまったく知らない世界で、一人ぼっちなのだ。
今更それを意識し、アンは胸の中をじんわりと締め付けられるよ
うな感覚を覚えた。

「そ、その、俺は謝らんぞ」

「あ、ごめんなさい。良さんを責めたい訳じゃないんです。あの穴
を壊したのは私だし、そもそも助けてもらわなかつたら、この子に
食べられてましたから。それに……」

あからさまに動搖している良に、アンは慌てて弁明する。
更に出かかつた言葉を、彼女は途中で飲み込んだ。

「どうした?」

「い、いえ……」

何となく、彼に対しても『それ』を言つのは憚られる。彼女自身それをはつきり断言できる訳ではなかつたし、それを言えばきっと、何故と問われるであろうから。

良が押し黙り、アンも口を開けない。気まずい沈黙が降りた。

「ただいま。あれ、どうしたの?」

そんな空氣の中、舞がピンク色の布を持つて戻ってきた。

彼女は両者の顔を覗き込むが、良は首を横に振り、アンは曖昧に笑うだけなので、諦めた様子でアンの前に立つた。

「アンさん、ばんざーい

ばんざいといつ言葉が、アンには何故か両手を上げるという意味
だと伝わる。

彼女は言われた通りに両手を上げ、それから舞が一いやつと笑つて

いる事に気づき、戦慄した。

が、舞はその伸縮性のある布をアンの頭の上から通し、腹の辺りで止める何もせずに体を離した。

「期待しちゃった？」

「し、してません！」

ニヤニヤと笑つたまま良の隣に座る舞に、アンは顔を赤くして言い返した。

ワザと先程の風呂の件を連想させたらしい。

良はもちろん訳の分からないといった表情をしている。

恥ずかしくなり、アンはもじもじとその腹巻とやらを弄つた。どうやら編み物のようで、彼女の腹にぴったりとくっついている。なるほど、確かにこれならお腹を壊さなくて済みそうだ。

この伸び縮みはお婆ちゃんが編んでくれたマフラーと同じ原理かしら。

そう考えた後、祖母の顔を思い出してまた気分が沈みそうになり、アンはプルプルと首を振つた。

「さつきから何だ」

不審極まる、といった表情でこぢらを見てくる良。

アンは彼に愛想笑いを浮かべながら、何か誤魔化す材料はないかと周囲を見回した。

それから、ふと視線が良の膝の上にいる子竜へと向く。

「あ、名前をつけませんか？」

「名前？」

「そのドリーヴンのです。飼うんですよ？」

「まあ、野に放つ訳にはいかないからな」

問いかけると、良はふふんとシニカルに笑いながら答えた。

「それにこいつは、我が魔王軍の第一の部下だ」

「それって私が第一なんですか？」

「違うわ。お前みたいなファンタジーパンピー略してファンピーは

一生召使いだ」

第一はこいつ。と、良は妹の頭に手を置き、ひと撫でした。

あ、舞ちゃん今一瞬凄い顔した。などと確認しつつ、アンは頷いた。

「そうですか……」

安心したような、役立たず扱いには少しガツカリしたような、微妙な気分である。

付隨する思い出がまた顔を出しかけて、アンはまた首を左右に振つた。

「……それはクセか何かなのか？」

「い、いえ、そうだ。そうじゃないですよ。名前ですよ名前。飼うにしても部下にするにしても名前がないと不便ですよー！」

もはや心配そうな顔になつてきた良を誤魔化し、アンは若干大げさに主張する。

その勢いに押され、ぎょっと身を引いてから、良はそれを恥じるようになつて口ホンと咳払いをして彼女に告げた。

「名前ならもう考えてある。クッキー、もしくはキクだ」

「えーっと、由来を聞いても良いですか？」

「こいつ、一見黒いが下に金色の皮膚があるだらつ。黒と金だ。だからクロキンとも考えたのだが、それでは安易すぎるんでクッキー。もしくは逆さにして縮めてキクだ」

「異世界の人つて、不思議な発想をするんですね」

「いや、お兄ちゃんだけだから。ていうか外見から離れられない時点でもう揃つても安易だと思うよお兄ちゃん」

「う、うるさいわ！　ああもうキクで決定」

女性陣に代わる代わる言われ、良はヤケクソ氣味にそう断言した。

「良いかキク。俺とお前で世界を征服してゆくのだぞ。代わりにお前は我が部下一号に昇格してやる

言いながら、良は子竜 改めキクを持ち上げ語りかけた。

「あ、ちょっとお兄ちゃんズルい！」

まるで交換条件になつていないとアンは思うのだが、抗議する舞

を見るにそれは重要な部分らしい。

それに対し、キクは短く「くああ」と答えた。

もしかしたらキクはもう人間の言葉が分かるのかもしれない。アンはそんな事をぼんやり考える。

「よしよし、良い子だ」

その返事に良は気を良くし、キクを片手で抱きなおしその頭を撫でる。すると、その遠まわしな由来である金色の皮膚が風に揺れる稻穂のように覗いた。

キクが目を細めおどがいを上げると、良は鼻から息を抜きながら頬を緩める。

良が初めて無邪気な笑顔を見せた気がし、アンも釣られて微笑んだ。

「な、何だ」

「いえ、良さんって可愛いなって思つて」

「……放り出すぞお前」

「ええ、褒めたのに！？」

アンが机に手を置き抗議の声を上げると、良は静かにキクを置き、机越しのアンの頭を両手で掴んだ。

「お・前・の・世・界・で・は、可愛いと言われて喜ぶ魔王がいるのか！？」

一語ずつ区切りながら、良が掌底でぐりぐりとアンのこめかみを嬲る。

その顔にはもはや先程までの笑みは無い。

「アンお姉ちゃん良いなあ」

「良くないですって！ 痛い痛い痛い！」

「クエエ」

指を咥えながら羨ましがる舞に叫びながら、アンはその痛みに悶え苦しんだ。

相手の気持ち良いツボが分かるという事は、痛みもより効率的に「えられるという事なのか。

まるで直接押しつぶされているような脳から、そんな言葉を絞り出される。

しかし、そうして騒いでいる内に、彼女の落ち込んだ気持ちはいつの間にか消えていたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6193z/>

魔王家の村娘A

2011年12月20日21時55分発行